
IS<インフィニット・ストラトス> ~ こんな青春アリですか? ~

水連寺 志在

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS>インフィニット・ストラトスく　　こんな青春アリですか？

【Nコード】

N1349T

【作者名】

水連寺　志在

【あらすじ】

IS学園に転入してきたのは水面下で国際指名手配中の女子にISの使える二人の男子だった！？こんな展開ありですかの、ドタバタ×ハイスピード×美少女×ロボのIS>インフィニット・ストラトスくが今、始まる！
とか言ってみたかったな。なんて。

プロローグ ものがたりのはじまり

「ビーツ！ビーツ！」

『何者かに侵入されました。直ちにこれを処理してください。繰り返します。何者かにー』

某所某軍基地研究施設。侵入者が現れたことを警告するブザーとアラウンドが流れ続けている。

「こんなに反応が早いなんて聞いてないわよ！あーもう！」

事の侵入者である少女が泣き言を叫んでいた。そして、目の前にある何かの装置を睨んでいた。

「とにかく、これ、を破壊しない事には帰るわけにも……。」

「いたぞ！捉えろ！」

「へい！もう来ちゃったみたいな！？」

呆気なく発見された。そろそろと軍人の群れが少女に迫ってくる。

「仕方ない……Come hear！アズール！」

その叫び声と同時に彼女を光が包む。光が消えると、そこには顔が仮面で隠れた青みがかった白銀のISが浮かんでいた。

「IS！？」

「こ、こいつ、まさか例の指名手配の！？」

しかし、ISはお構い無し。

「目標をー」

装置の方を再び向くIS。手には剣が展開されている。

「ー切る！」

装置は真つ二つに切断され爆発する。爆発で天井が崩れ蒼い空が綺麗に見える。軍人達は瓦礫に飲み込まれた。

「オツケー！目標達成！じゃあねー！もうこんな研究するなよー！」
というセリフと共にそのISは空に飛んでいった。

「おのれー！……シルバーメテオ（白銀の流星）めー！」

瓦礫に埋もれた一人の軍人が飛んでいったISを睨みながら叫んだ。
国際指名手配中の先ほど襲撃にきたISのコードネームを・・・。

プロローグ ものがたりのはじまり（後書き）

「ふいー、ちゆかれた〜。」

白銀のISはとある研究所にいた。光の粒子になり、展開がとかれる。

「おつ〜」

「お疲れ様でした。」

「うん。ただいま〜。」

二人の男子に少女は迎えられる。

「うん、三人揃ってるね？」

「束ちゃん!？」

そこに現れたのは希代の天才、篠ノ之束だった。

「三人に任務を与えまーす！明日からIS学園に行ってください〜い！」

第一話 いざ行かん、IS学園へ！（前書き）

「IS学園に行ってください！」

「いやいや、東ちゃん急展開過ぎワロタだよ！」

「まあ他にも転校生がいるみたいですから、タイミング的にはちょうどいいかと。」

「さすが！わかってるね！」

「じゃあいつもの仕事は？」

「学園生活と両立してね〜ん。」

「そんなバカな〜！！！」

私の声が響き渡った……。

第一話 いざ行かん、IS学園へ！

―IS学園職員室

何の前触れもなく、その電話がかかってきた。

『やつほー、ちーちゃん。』

「その名で呼ぶな…。おまえからかけてくるなんて珍しいな。どうせまたろくでもない事だろ？」

『おおー。ちーちゃんご名答！さっすが私のヨ』
ぶつつ。―切れた。

二重の意味で。

「わー！ちよつと、待ってよ！」

束の願いが通じたのか、携帯は再度鳴り出した。

「はい、みんな、抱きしめて！銀河の っって待って待って待って
よおーちーちゃん！」

「…はあ。まあいい。それで？」

『あ、そうそう。うちの子供たちを預かってほしいの。って言った
つて、私の子じゃないけど。』

「お前が、人を？」

『みんなちよつと訳ありでねえー。』

「はあ、天変地異の前触れか？」

『そうかもね〜。』

「で、具体的に何をすればいいんだ？」

『えつとねー。あの子達の保護、騒動への対処、そして、専用機持ち
ちとして、ちーちゃん流でビシバシ鍛えてあげて。』

「それは普段学園でやってることなんだが。」

『そう。いつも通り（……………）をお願いね〜。そのほかの処遇
はそっちに任せるよ〜。』

「わかった。要するに、IS学園に編入されておけばいいんだな？」

『ちーちゃん話わかるね〜。さっすが私私のー』
「ではな。」

『あ、ちーちゃん！もう一個だけ！』
「なんだ？」

『もうちよつとしたら会いに行くよ……』
「それだけか？」

『もう一個、一人は星ちゃんです。』
「……そうか。」

『うん！それだけ！じゃっ。ちーちゃん、またね！』
ぶっつ。っー、っー、っー。

携帯を閉じ、明後日の方を向きながら、ちーちゃんこと、織村千冬はつぶやいた。

「星、か……。」

千冬は一瞬だけ、昔を思い出したような、優しい笑みを浮かべた。それは、東チルドレンの編入3日前の話。

三日後

side Akari

今、廊下の途中だよ〜。その間にちやちやっど自己紹介しようね。

私は^{あまかわ}天河^{あかり}星。3月5日生まれ。身長149cm、体重ナイシヨ、もちろんスリーサイズもナイシヨ。残念賞〜

「何やってんだ、オマエ。」

「ん〜？ナイシヨ？」

今のは^{としまわ}智沢^{まほ}真咲。半端ないくらいISの整備が上手いの。東ちゃん譲りかな？姉弟じゃ無いけどね。身長は高いよ〜。あ、私が小さいだけか……。そして、男なのにISが使えるの！凄いよね〜。

「星、真咲、そろそろ着きます。」

「了解。」

「ういゝ。って、クラス違うけどね。」

最後に、六音 ユウ（ろくね ゆう）。身長は私より少し高いよ。セスタフラッグ社の長男！でも社長令嬢って言いたくなるくらい女の子みたいなお顔立ちなんだ。彼もIS使えるの。ISスーツのお陰なんだって。あ、これ企業秘密だった……。ちなみに、話し方が丁寧なだけで、クールとかそんなんじゃないよ？

「えいっと、私が四組で、」

「オレが一組。」

「ボクが二組。」

「僕も一組。」

「ノリが良いねえ、シャロ君！」

こっちは、シャルル・デュノア君。この子も今日転入なんだって。凄いいね。貴公子！カッコイイ！ちなみに、ユウの幼なじみで、あだ名を付けたのは私。

「あゝ、そのあだ名決定なの？」

「うん！何と言うか……。君を見た瞬間、ティーンと来た！」

「そ、そう……。」

なんかげんなりしてるよ。Why？

「すまん、こいつ、初対面の相手にはいつもこうだから。」

「は、はあ……。」

「ちょっと、マチヤキ（真咲の事）？変人扱いしないでよ？」

「いつもの事です。」

「あー！ユウまでー！！！」

バシィ！

「お前ら！静かにせんか！」

「かはっ」

見て見て！私飛んでるよ？

「ぶへえ！」

まあね。そりゃ頭から突っ込むさ、床に。

「何で・・・私なの・・・ちふーねー」

バシイ！

軽快な出席簿で叩かれる音。

「学校では織斑先生と呼ばんか、天河！」

「あ、おはようございます。先生。」

ユウがスルーした。

「うむ、揃っているみたいだな。」

「ちよっと！私の心配はナツシングなの!？」

「自業自得だろ。」

「いつもの事です。」

「あはは・・・。」

マチヤキを筆頭にユウ、シャロて・・・私そんなに人徳ないの？

「では、割り振られたクラスに行け。天河は放課後、私の所に来い。」

「

「は、は〜い・・・。」

私はダメージを残したまま、四組に向かった。

side Masaki

やっとオレか。真咲だ。作者からは主人公って伝えられているのに今からだぜ？いくら何でも星喋りすぎだろ。

「お前ら、入れ。」

「はい。」

「はい。」

「あの一・・・」
クラスの方が恐る恐る口を開く。
「二人は付き合ってるの？」
「どうしてそうなるんですか!？」
「そ、そうよ!あたしがk「ああ。りんりんは織斑君一筋か」
ちよつちよつちよつちよつと、言わないでよ〜!!」
「鈴は相変わらず一夏君なんですね〜。」
「だから、言うな一!!!」
飽きない学園生活を送れそうです。

四組

side Akari

「と言うわけで、四組には残念な事に、オーストラリアから来た織斑一夏の妹こと、私、天河星が転入しまーす!!」
みんな残念そうな目を・・・していない?

「織斑君の・・・」

「妹・・・?」

「つて言っても義理だけどね。」

「たとえそうだとしても・・・」

「色々教えてもらえる・・・?」

「つまり・・・」

「喜んで良いのよね・・・?」

空白の三秒。

「やったあああああ!!」

結局ソニックウェーブは起きるのね・・・。

「神は我々を見捨てなかつた!」

「ありがとう!そして、ありがとう!」

「男子じゃないけど得した気分だ!」「これで、新刊が書きやすく・

「」

いろんな意味で、ほんと元気よね。見習ってほしいわ。

「ねえ？簪ちゃん。」

「ねえって、何……………?」

「別に?」

「そう……………。」

「作業は順調?」

「ぼちぼち……………。」

相変わらず暗いな、更識簪ちゃんは……………まいつか。

この上に、束ちゃんからの仕事が入るのか……………。なかなか楽しそうなのな学園生活になりそうね

第一話 いざ行かん、IS学園へ！（後書き）

星「という訳で始まったけど・・・」

真咲「前半パクリだな」

六音「書き直す前の奴の」

星「良いの？」

真咲& amp ;六音「さあ？」

第一・五話 過去々おもいで

放課後

side Akari

ISS学園職員室

「さて、お前は今までどこをほつつき歩いてきた？」
そんな厳しい言葉から始まった。

「ずっと東博士と居ました」

「なぜ、急に居なくなつた？」

「・・・ごめんなさい」

「答えになつてないぞ」

「・・・言えなかつた」

サヨナラが。

「東から連絡をもらうまで、どれだけ心配したと思つている!？」

「・・・ごめんな・・・さい」

それしか、言葉が出てこなかつた。

重い沈黙だけが続いた。

しかし、それを壊したのはちふーお姉ちゃんだった。

「帰つてきたら帰つてきたで、指名手配者になつているとは・・・
まあなんにせよ、元気だったみたいだな」

「・・・」

「心配して損したぞ。」

お姉ちゃんは笑っていた。

「ハーバード大学、卒業おめでとう」

「知つてたの!？」

「私を誰だと思つている? 家族の事だからな」

「・・・ありがとう」

「んっ」

頭をくしゃくしゃに撫でられた。

「さて、本題はここからだ。」

声のトーンが変わったのがすぐにわかった。仕事モードになったみたい。

「お前のISの事だが、使用を許可する。」

「えっ」

あの‘IS’を？

「ただし、授業はすべて、打鉄でやること。良いな？」

「自主連の時はオツケーって事ですね。」

「そのとおりだ。なお、非常時は私の指揮下に入りつつ、独自で動け。」

「はい」

「あと、束からの仕事の時は一言いってから行け。あの二人もな」

「了解です」

「あとお前にはこれをやる」

突然、あるものを渡された。IS学園のロゴが入っている。

「これは？」

「IS学園、地下特別区画に入るためのパスだ」

「ええ!？」

「私はお前をIS乗りとして、妹として信じている。だからこれを渡す」

「.....」

つまりはこうだ。

『お前なら学園の秘密を預けられる。だが、束であっても、情報の開示は認められない』

「難しい事言いますね」

「私だからな。話しは以上だ」

「はい。失礼しました」

そう言っつて、私は職員室を後にした。

「さて、今日中に、『ゴーレム1』でも見て帰りますか。」

第一・五話 過去々おもいで（後書き）

ぼんやり、更新してたら、今日はISのワンオフイベントの日だった。

第二話 真咲「あだ名決定！」

Side Masaki

1組

入学二日目、それは起こった。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

重い沈黙。たたずむ転入生。眼帯、ロングの銀髪装備。

「・・・挨拶をしる、ラウラ」

「はい、教官」

間違いないね、ドイツの軍人。千冬さん・・・言いくいなくいな。ちーさんの事を教官、つまり、あの頃にちーさんが育てた一人だろう。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

先生とクラスの沈黙はどうでもいい。眼帯してるってことは、つまり、黒ウサギ隊シュバルツェハーゼって事か。ハーゼ・・・ウサギ・・・因幡・・・うどん亭・・・兎・・・

「いきなり何しやが・・・つまりバニーちゃんか！」 - は？

一夏が殴られた？そんなの関係ない！自分しだ（ry

「おいそのラウラとか言っちゃつ！お前のあだ名はバーちゃん
決定だ！」

『！？』

テレーツテレー！

ビシッとラウラを指差す俺、決まってるぜ……。誰にも考え付か
ない名案だな……。

「……………」

あれ？何で沈黙？おかしい！
一体何を間違えたというのだ！

「黙れ。」

バシィ！

「がはっ……………」

こ、これが噂の、出席簿アタックか……。

バタリ（真咲の倒れる音）

「あ……………ゴホンゴホン！ゴホッ！ゴホッ！」

むくり） 真咲、教室に立つ）

何やってんのちーさん……。咳払いしてむせてどうすんのさ……。

「ではHRを終わる。各人は着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でISの模擬戦闘を行う。解散！」

十十十十十十十十十十

バシィ！

「なぜ遅れた？」

痛い。

作者が色々とすっ飛ばして、もう着替えてグラウンドにいることは、少しくらい腹をたてていんだよね？

「物珍しい男子として圧倒的多数の女子に追いかけ回されなんとか更衣室についたあと、織斑一夏男史がどうしてもシャルル・デュノア氏の裸を見たいと、「そんな変なこと言ってねえよ！」バシィ！
- 破廉恥極まりない発言のせいで一つ騒動が起き、若干着替えが遅れ、現在に至ります。」

（一夏乙）

とか思いながらやったわりには、冷静な状況報告だね。全く……

。ほら見る、一部の美術部が、織斑×デュノアとか、デュノア君総受けでとか、いや智沢×織斑っていうのがとか、何やら薔薇色な発言が聞こえてくるぞおい。

「はあ、まあ良い。鳳、オルコット、前に出てこい！」

「えっ!?!」

「何で私が？」

とぼっちりですわ、と渋々二人は歩いていく。

「専用機持ちなら早く始められるからだ。それに……。」

ん？なにになに？あいつに？良いところ？ ああ恋する乙女は使いよ
うってやつか。

「やはりここは！」 「専用機持ちの！」

「「見せ場」「」

「ですわ！」 「よね！」

ま、どっちが言ったかわかるよな？アニメと原作をcheck！
しかし、最初っからクライマックス並みにテンション高いな。

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんが相手でも構いませんが。」

「ふふん こっちの台詞よ。返り討ちよ。」

「慌てるなバカども。相手は……。」

第三話 山田「へ、別にたいした事は・・・／＼／」テレドヤッ

「対戦相手はー」

「ど、どいてくださーい！ー！ー！ー」

なんぞ!？

ドカーン！

ゆっくりぶっ飛んで行ってね！

真咲「いってー。なんだなんだ？」

一夏「百式の展開が・・・。」

ユウ「いたた・・・。いったい何が」

むにゆう

「「「ん?」「」」

想像してごらん。仰向けに転がった山田先生、もといまやんがいるだろ?そこに偶然転げ混んで胸にどうこうできたらある種の幸せがあるだろ? いや、この際胸がデカイだけでも良い。むしろ、ちっぱいでもパラダイスフィンガーって揉めるだけで構わん。

だけどな、膨らんだ胸があるのはまやちゃんとか、クラスの女子だけじゃ無いんだよ。わかるよな？

だからな？

ドゲシ！ドカツ！ゲチャ！

一夏 まやちゃん

ユウ ラウラ

俺 ちふーさん

「ギョウして……ニョウ……なっ……t」

どむ

「織斑先生！それ以上やったら智沢君が！」

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハッ！・・・だがまあ、大丈夫だろ。」

(えく・・・。。)

その時、2つのクラスは一つになったのである。

ちなみに、俺が寝ている間に鈴とセシリアはこてんぱに負けたそう
な。

ゆっくりぶつ飛んだ結果がこれだよ！

+++++

「これより実習を行うー！」

「うわあああ！？」

バシィ

「大声をあげるな、智沢。」

あれ？何かとぼっちりを受けた気がする。なんで？

ちなみに、俺はあの成敗の後、赤毛の子の船に乗った後、緑髪の女

の子に「まだ来たらダメです」と言われて、なんか落とされたんだ
D A

「専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰、
智沢、六音だな。各グループのリーダーは専用機持ちがやれ。じゃ
あ、別れる！」

「先生。」

「なんだ智沢、六音。」

「自分達の専用機は」「本国に」

「関係ない。やれ。」

一瞬で切り伏せられた。

その後、一部の女子たちは頭を叩かれたり、箒が一夏にお姫様抱っ
こされたり、俺が悪ふざけでユウをお姫様抱っこしたら照れられた
り、俺がグラウンド20周を食らったり、俺と一夏が片付けをさせら
れたりした。

まあ、片付けはISを部分展開して一瞬で片したがな。
そのまま押して片してた一夏の驚愕顔はマジ面白かった。

第三話 山田「へ、別にたいした事は・・・ノノノ」「テレドヤッ」(後書き)

志在「これくらいなら楽だね」

星「あそ」

真咲「良いから更新しろ」

ユウ「・・・。」パソコンなう

志在「・・・はい。」

第四話 星「忘れてた……。」（前書き）

昨日

ISS学園職員室

星「と言いついで……。」

千冬「ああ。気を付けてな。」

第四話 星「忘れてた……」

IS学園四組

「あれ？今日は天河さんお休み？」

「あんなに元気が取り柄な女の子がね？」

「なんでかな？盾無さんは知らない？」

「……知らない。」

「そっか。ありがとう。」

???

Side Akari

「で、それらを焼き尽くしてこいと。」

「そっだよ。さっすが星ちゃん、頭の回転が速いね。」

おはようからおやすみまで。一日中元気な天河星です。

「んなもん、政府に任せりゃ良いじゃないんですか？」

「ダメです。この件は政府絡みでもあるの。だから鉄槌をね」
「ミ」
キラッとしてしてるね東博士。

「でも、三機でと言うのは？」

「そこは簡単でしょ？ユウが陽動、真咲が実行、私は首謀者を引っ捕らえて警察につき出す。」

「あの人たちが何するかわからないしね。」

さて、改めて状況を説明しようね。一話で東博士に派遣されてIS学園にいったでしょ？あれは私たちが束チルドレンっていう委員会公認かつ非公式と言う組織というか、東博士の私兵なの。

それで、今回のミッションは「麻薬密売の取り締まり」なわけ。国とかは規則で言えない事になっているから言えないよ。

「じゃあ作戦開始は、1325からよろしく。」

「はい。」

「うい〜。」

「了解。」

ISのプライベートチャンネルを開く。

『あれね……。』

『ああ……。』

『真咲、人間は？』

『ん……。反応が無いな……。』

『そんな簡単には居るわけ無いですよ……。』

『『ですよね。』』

納得の理由。取引場だもの。

『お、人が集まってきたぞ……。』

しかし、私とユウのISには反応が無い。真咲のISは索敵能力に長けてるからね。

『東博士どこから情報強いられたんだろ……。』

『どこでも良いじゃ無いですか。』

『んで、どーすんだ？』

『とりあえず、ユウが、偽装された本物の身分証明書、である警察手帳を持って倉庫に入る。』

『はい。』

『次、真咲がゴム弾を発砲。関係無しにやっちゃって良いわ。』

『オツケー！』

『そして私が上手く追い込んでお縄を頂戴したあと通報。一目散に撤退。』

『んな安易な。』

『気を抜くんじゃ無いわよ？何かあるかわからないんだから。これは、経験、談よ。』

戦車とかRPG（対戦車ロケラン）とか出てきた時は焦った。ISで案外ななんとかなったけど。

『へーへー。』

『返事はyes！何かを垂れる前と垂れた後にサーを着けなさい！』

『どこの軍ですか……。』

『しまった。調子乗った。まあ良いわ。野郎共！準備は良いか！？』

『いつでも！』

『どいつでも！』

『いけっ！ユウ！』

ミッション・・・スタート！！

約一時間後。

上手にできました。

「ふう。オツケー。お疲れ様。」

「はあ、人に重点的に発砲したり、真咲がこっちを打ったり、急に
実弾使い始めた時はどうなるかと思いました。」

「だから悪かったって言ってるだろ！？」

(俺達はこんなやつらに負けたのか・・・・・・・・。。)

あれ？なんかこのいかつい人達泣いてる。

「真咲、仕上げ。」

「は？」

「何をするんですか？」

そんなの、決まってる。

「倉庫ごと、粉塵爆発させるのよ。」

「何でんなこと……。」

「それ、本気？」

「ああ。本気と書いてマジだ。」

「……殺していいかな？フラって来たわ……。」

「今、ここで焼却処分しとかないと個々にある麻薬は政府か警察によつて、正当な手続きで処分されるのよ？言ってる意味わかる？」

「……ああ。そうゆう事。」

細かい説明は省くわよ。

「と言つ訳で。」

「あいよ。」

真咲が倉庫に入っていく。
そして発砲した。

バババババ！

マシンガンで。

「アホ！何やってんの！」

どかーん！

真咲 イズ イン 倉庫。

……。あ、黒焦げになって出てきた。

「どうなるかと思ったぜ。」

「当たり前だよ！何やってんのあんたは！」

「いや」。爆風の中から颯爽登場！みたいなの？」

「できてないじゃん！！」

「何でだ？」

「マシンガンをフルオートでぶっぱなすからよ！」

撃つ 当たる（打ち続ける） 粉が散る（打ち続ける） 撃った弾
で粉塵爆発（打ち続ける） 逃げられない（打ち続けている）

「なにっ！？そうだったのか！？」

「真咲……。気づきましようよ……。」

まさか、真咲がこんなにバカだなんて誰が想像しただろうか。いや、昔からだった。

「と、いうか、あんたあの爆発で良く生きてたわね。」

「まあな。なんせ俺は、悪運が強いからな。」

「さて、帰るわよ。」

「スルーかよ!!」

三機のISが飛び立つ。

まるで、「白銀の星」の様に……。

その後、駆けつけた警察達は泣いたと言っつ。

第四話 星「忘れてた……。」（後書き）

星「疲れたわ……。」

ユウ「ですよね」

真咲「星〽帰ったらなんか作ってくれ〽」

星「あいよ〽」

ユウ「久々の星の料理……」ワクテカ

第五話 一夏「弁当食うぞ」

Side Masaki

「……どういことだ。」

「ん？」

昼休み、俺たちは屋上にいた。ちなみに、作者の通う学校には屋上が無い。

「天气が良いから屋上で食べるって言っただろ？」

「そうではなくてだな……！」

「せっかくの昼飯だし、大勢で食った方がうまいだろ。それに真味達は転向してきたばっかで右も左もわからないだろ？」

「そ、それはそうだが……。」

諦める幕。こいつはそんなやつだ。

「しかし、一夏に鈴餅すずもち、中学以来か？」

「ああ。そういえばそうだな。」

「あんたその呼び方……。あんたがここに来たって聞いた時はビックリしたわよ。」

「三人は同じ中学なの？」

「ああ。つつても俺は中学だけだがな。」

「真咲は中一の時に来たんだよな。」

「そして、あたしと同じ中二で転向したのよ。」

よく一夏と五反田と色々しでかしたっけ。弾と蘭元気かな？

ちなみに、鈴餅っていうあだ名は俺が考えた。由来なんて簡単だろ？こいつ胸がぺったんこだからな。ぺったんこぺったんこ餅っていうこと。意味はまだ知られてない。とりあえず、よく餅食うな、って言う理由にしてある。

「ごめん！遅くなっちゃった！」
星が駆け足でやって来る。

「おお星！」

「えへへ。ちよっとでこずっちゃった、お兄ちゃん。」

「お兄ちゃん？」

「一夏さん、どづいつことですか？」

「ああ、コイツは俺の妹だ。」

「「ええ！？」」

まあシャルルとセシリアは知らなくてもおかしくは無いよな。

「はじめまして、オルコットさん。私、天河星って言います。オー
ストラリア代表候補生です。」

「ええ。イギリス代表候補生、セシリア・オルコットですね。よろ
しく。」

「一夏の妹なのに天河？」

「そこには色々事情があつてな…。」

「「星！」」

「ほー姉ちゃん！りん姉ちゃん！！」

「元気だったか？」

「おかげさまで。」

星の話によると、小四で天河姓になって、小学校卒業とあわせて束
チルドレンになって、残りでハーバード大学卒業したんだと。本人
は詳しいことを話したがらないがな。細かいことは知らん。

「星も来たので食べませんか？時間が無くなっちゃいます。」

「ユウ、いいこと言うじゃない！」

「お前待ちだったんだよ。」

『いただきます』

「無視すんなよお前らー!!」

「真咲五月蠅いわよ。」

「り、理不尽な…。」

わいわいがやがや。賑やかである。

このあと、一夏は天国と地獄を見ることになった。星の弁当食べたあとにセシリアのを食べたら、なあ？

その頃、シャルルには一つの疑問があった。

「(何で、僕もオルコットさんも名乗ってないのに名前がわかったんだろっ。)」

と…。

第五話 「夏」弁当食つぞ (後書き)

色々すっ飛ばしました。

第六話 ルームメイトはブロード貴公子（エンジェル）（前書き）

すみません。半ば放置ぎみでした！マジすみません。

第六話 ルームメイトはブロード貴公子（エンジェル）

第四アリーナ

Side Masaki

「一夏が鈴さんやオルコットさんに勝てないのは、射撃武器の特性を理解してないからだよ。」

「そうなのか？一応理解してるつもりなんだが……。」

「これが緊張をほぐすために物理の問題を出したやつが発言か？」

「真咲、どついう意味だよ？」

俺たちが転向してから五日が立って今日は土曜日。授業は午前だけで午後はフリーだ。だからこそ、弱小一夏教育計画が発令されたのだ。

本当は暇だから付き合ってるだけだ。

ちなみに俺は数の都合上リヴァイヴを使っている。よく起動したなと思いつながら。ちなみに、俺の専用機はまだらしい。あいつヤル気あんのか……。

ユウは専用機。名を《蒼柳》。詳細は後程。こいつはISスーツが特殊なだけに起動しないとおかしい。ついさっき届いたらしい。最適化前。

星は相変わらず仕事とか言ってるどっか行ってる。

しかし、昨日のお茶会と言う名の男子の親睦会はさんざんだった。

まず抹茶をユウが持っていて半ば本格的になっちまった。次に抹茶が甘かった。最後に、

のほほん、どっから沸いて出てきた。

結果のほほんが残りの抹茶飲んで帰って呆気に取られて終わったんだよな。

「一夏君のISって、後付けなしの刀一本接近格闘オンリー機なので、誰よりも射撃の特性を把握しないと勝てないですよ？下手な豆鉄砲見たいに打っても全弾当たります。」

ユウってたまに酷いよな。ま、言ってることは的を得ているから良いんだが。

「」

ほら、一夏が言葉を失ってしょんぼりしてるぞ。

「ユウ、辞めとけ。こいつが鍛練が少ないのはわかりきっている事だろ？」

「」

とりあえずとどめをさしてみた。

「二人ともストップだよ？一夏のライフがほとんどゼロだよ。」

シャルル、地味に笑いながら言うな。

「ふん。私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ。」

「あんなにわかりやすく教えてやったのに、なによ。」

「わたくしの理路整然とした説明に何が不満だと言うのかしら。」「……。そう言えばこいつらの説明って酷いらしいな。一夏から聞いたぞ。ここは一喝入れておくか……。」

「おい、お前ら。お前らみたいな説明でわかる奴がいるか。」

「何だと?」

「なんですって?」

「どうしてですか?」

駄目だこいつら。速く何とかしないと。

「まず幕。射撃武器の特性はガンツドゥンツズドゥンツ!そしてドゥン
ドゥンドゥン。何が言いたいかわかるか?」

「わかるわけはないだろ!」

「でも、いつもの幕みたいよね。」

「確かにそうですわね。」

「くっ……!」

ざまあ。援護射撃助かった。

「次、鈴餅。お前、自分の感覚を人がわかるわけないだろ。」

「そんなの!」

「感覚つてのは経験から産まれるんだ。一夏、いや、相手にはお前と寸分狂わない経験なんてある訳がないだろ。つまり、わかるわけが無い!」

「くっ……!」

悔しそうだ(笑)。ざまあ。しかし、作者は鈴餅が好きらしいから、いじめるのはここまでにしよう。

「最後にセツシー。」

「セツシーって・「ツッコミ禁止」……はい。」

「お前の説明は論理的なだけだ。第一、角度を求める割にはお前がずれてんだよ。」

「な、なんですって!」

「はっ!良いところ育ちの嬢ちゃんが良い子ぶるんじゃないかねえっての。」

「」「」「ぐぬぬ……。」

悔しいんですねわかります。

「そつなのか!?!」

「一夏タイミング良すぎ……。」

「どうした真咲。」

「こつちの話。で、何がそーなんだ？」

「唯一使用特殊能力に拡張領域パススロットを取られたって話です。」

「ああ……。そんなの普通だろ常孝。」

だつてちふーさんの暮桜がそうだったんだぜ？あれ？考え方おかしいか？

ユウは気まずそうだな。確かにあんなのが自分のISに積まれてるとか思つたらな。

ん？なんのことかつて？教えねえよ。

「じゃあ、射撃武器の練習してみようか。はい、これ。」

シャルルが一夏に渡したのは五五口径アサルトライフル《ヴェント》。疾風って意味だ。

「え？他のやつアンロックの装備は……。」

「所有者が使用許諾すれば、登録者は全員使用可能です。もちろん、一夏君の雪片も例外ではありません。」

「そ、そうなのか……。」

「という訳で一夏君、雪片を貸してください。」

『！！？』

ユウ！？お前、何言って……。

「何事も経験です。まずメインコンソールを開いて……。」

「お、おう……。」

ユウの的確かつわかりやすい説明。あっという間に使用許諾を出せた。

「では、僕は雪片を使ってみますので、一夏君はそのヴェントで射撃訓練を。」

「お、おう……。」

とりあえず、いつも通りに剣を振るうように雪片を振るうユウ。対してシャルルに手取り足取り教えて貰ってる一夏。三バカはぐぬぬって言いながら一夏を見てる。

俺はすることない。暇。

しばらく後

「なるほど、だから、簡単に間合いが開くし、続けて攻撃されるのか……。」

わかってはいても、一夏は負ける。こいつかつとなったら猪突猛进だからな。どこかのちびっこと一緒に……。

「で、シャルルのISなんだけど、山田先生とか真咲が使ってるのとだいぶ違うように見えるんだが、本当に同じ機体なのか？」

「ああ、僕のは専用機だからかなりいじってあるよ。正式にはこの子の名前は《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》。基本^{プリセット}装備をいくつか外して、その上で拡張領域を倍にしてあるんだ。」

「倍！？そりやまたすごいな……。」

まあ凄いつちゃ凄い。

だが一つ、気に食わねえことがある。

「おい！！ちまちましてねえでさっさと出てこいよ！^{ルキー}第三世代のバニーちゃんよおー！！」

「ふっ……。量産型^コに言われなくても出てくるぞ。」

そこにいたのは他でも無い。バニーちゃんこと、ドイツ代表候補生、ラウラ……。えーっと……。思い出した。ボーデヴィツヒだった。

第六話 ルームメイトはブロード貴公子（エンジェル）（後書き）

天河「ねえ。」

智沢「ん？」

天河「くしゃみしたんだけどなんか噂しなかった？」

智沢「別に？」

天河「そう……。なら良いのよ。」

第七話 真咲「エンジェル分が足りねえぞ、おい。」（前書き）

水蓮寺「すみません」

真咲「謝ってすむ問題かよ」

水蓮寺「本当にごめんなさい」

真咲「前回でジェントルをエンジェルと間違えてんだから、そこま
で書けよ！」

水蓮寺「その代わり今回お風呂回じゃないか！」

第七話 真咲「エンジェル分が足りねえぞ、おい。」

Side Masaki

相変わらずアリーナ

バニーちゃんが高いところに立ってる。IS展開して仁王立ち。でーんという効果音が似合いそうだ。

ドイツ第三世代、シユヴァルツエア・レーゲン。AICを積んでいく。ワイヤーブレードなどで一応一対多に応戦できるが、正直、こいつは多対一向きだろうと思う。ま、どのみち俺の本当のISとはかなり相性が悪い。

「おい」

バニーが一夏に呼び掛ける。

「・・・なんだよ」

バニーはふわりと飛翔しながらこっち来る。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え。」

「だが、断る。理由がない。」

「貴様には無くても私にはある。」

わからなくはない。一夏が第二回モンドグロツソで亡国企業に拉致られなければちぶーさんが二連覇は間違い無かっただろう。

星は悔しがってたな。『何で気づかなかったのかな。私が行ければお姉ちゃんは優勝してた筈なのに。私ってほんとバカ』って。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を・・・」

そして、冷たく言い放った。

「貴様の存在を認めない」

少なくとも、バニーは何も気づいてない。恋に盲目な純情乙女バニーちゃんと言ったところか。

正直イライラする。

「で?」

だから、俺は口を開いた。

「量産型^{セイ}がなんだ?」

「だからなんだ?何が言いたい?」

「だから私は・・・一夏を否定したからって、モンドグロツソはやり直せないぞ」 - 何が言いたい」

「わかんねえようならはつきり言おう。恩師の家族を否定するやつはどんなに才能に秀でた弟子でも、人間として、最低にグズな奴って事さ。」

「なん・・・だと・・・?」

「恩を仇で返すような奴なんだよ、お前は」

刹那レーゲンのビームブレードが展開される。

「止めとけよ。もうすぐアリーナの使用時間が終わる。勝負は次にも。」

「ならば、それまでに決着をつけるまで」

言葉と同時に迫るバニー。ブレードを振りかざす。

ゴガギンッ!

しかし、その刃は間に入った雪片を持ったユウに止められる。

「こんな密集空間でいきなり戦闘を始めるとは、ドイツ人は随分と沸点が低いんですね。隣国として恥ずかしい限りです」

「貴様・・・」

『その生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』
騒ぎを聞き付けた担当教師がスピーカー越しに叫んでいる。

「・・・ふん、命拾いしたな」

興が削がれたのか、バニーはあっさり身を引いた。展開を解除して普通に帰っていった。

「真咲、辞めてくださいよ」

「わりい。つい、な」

「今日はもうあがるつか。4時過ぎたし、どのみちアリーナの閉館時間だしね」

素晴らしい提案だ。流石シャルル。という訳でみんな帰りましたとき。

この後、あんな事になるとはな・・・。

IS学園 真咲・シャルル部屋

「たらいま〜。」

部屋に帰ってきた。シャルルがシャワー浴びてる。そういやボディソープきれてたっけ。エコに詰め替えタイプだ。素晴らしい、そして素晴らしい。

いつも俺が先だから、放置してたんだよな・・・。

「しゃーない。持っていくますか…。」

ガチャリ

「シャルル詰め替え…」

「ま、真咲…?」

…。

いま目の前で起こっている事をありのままに話すぜ。今日はいつもより遅く部屋に帰ってきたんだ。そしたら、シャルがシャワー浴びてたんだ。いつもは俺が先に浴びるからボディソープの詰め替えを忘れてた。だから、持っていったら、・素晴らしい・シャルの裸体が…。何を言ってるかわからないだろうが俺にもわからん。だが、事実なんだ。

はっと我に返ったシャルが慌てて胸を隠した。

「きゃあっ!?!」

「すまぬ!」

ボタン!

とドアを閉めて脱衣場からでる。

「詰め替え…そこに落ちてるはずだから…。」

「う、うん…。」

はー。このタイミングとは。しかし…。

(…綺麗だったな。)

良い目の保養でした。本当にありがとうございました。

おい、誰だそこで俺を変態といったやつは。俺は変態ではない！変態という名の紳士だ！

第七話 真咲「エンジェル分が足りねえぞ、おい。」（後書き）

真咲「・・・おい。」

水蓮寺「はい？」

真咲「まるごと青春謳歌の引用じゃねえか!!」

水蓮寺「・・・テヘッ」（のワの）

真咲「テヘッじゃねえ!!死ね!!一辺死ね!!」

水蓮寺「許してヒヤシンス」

真咲「ヒヤシンスってなんだよ!!」

水蓮寺「真咲は頭をヒヤシンス」

真咲「だからヒヤシンスってなんだよ!!」

水蓮寺「ごめんください」

真咲「ヒヤシンスどこ行ったんだよ!!つか貴様、日常ネタもパクリかあああ!!!」

第八話 シャルル「僕はね・・・」

Side Masaki

「・・・。」

別にお通夜とか、胸を見ていたいとか、そういう訳ではない。ただ単に話にくい状況なだけである。

正直、シリアスな空気は嫌いだ。シリアルに変えたくない。

あ、なんか徐々に食べなくなってきた。
なので、俺から切り出してみよう。

「で？」

「え？」

「何で男のフリなんかしてたんだ？」

「それはその・・・実家の方からそうしろって言われて・・・」

「やっぱりか・・・。」

「ふーん・・・。そんなにデュノア社って経営ヤバイのか？」

「え？」

「えって、ちよつと考えりやわかるだろ。この時期に男なんて、一夏イレギュラーみたいないな異端者か、君みたいないなデータを盗みに来るような輩だけだぜ？」

「!?!」

シャルルの眉がピクリと動く。

「凶星か」

「……知ってたの？」

「別に。ただの勘から知りたくなって調べた上で、カマかけただけさ」

「……真咲って、頭いいんだね。じゃあ言わなくてもわかるよね？僕がー」

「シャルロット・デュノアっていう女の子って事だろ？」

「うん……」

再び沈黙。春では無い。

「父に言われたんだ。男のフリをして織斑一夏に近づき、白式のデータを盗んで来いって。後日、真咲たちのデータもね」

「……大変だな。妾の子って」

「そんな風に言わないでよ!?!」

シャルルが大声で言った。

「僕だつてね、望んで妾の子になつたんじゃ無いんだよ!？この辛さがわかる?」

「クツクツク・・・。フーハッハッハッハ!」

笑いが込み上げてきてしょうがないので、とりあえず大声で笑ってみた。

「何笑つてるのさ!僕は真剣にー」

「妾でも片つ方の親が居るだけましだろ。俺なんか目の前で二人とも死んじまつたからな」

「え?」

あの日、俺と二人の妹を残して。

「家がテロに巻き込まれたんだ。妹達と遊んで、帰ってきたら家が吹っ飛んでた。両親共々、見るに耐えないくらい悲惨なもの、この世のものとは思えないくらいのものになつてたさ・・・」

今でもあの黒焦げた家、父さんと母さんは鮮明に思い出せる。

「・・・」

「その日一日中泣いた。暫くは親戚に預かつて貰つてたが、しばらくして、俺だけ引き取られた。その時、俺は智沢真咲って名前になった」

「えっ、じゃあ・・・」

「俺も本名じゃ無いよ。似た者同士だな、俺たち」

「似た者、同士……」

「目的まで一緒だからな。もう笑っしかないだろ」

「目的、まで？」

東さんに言われたんだよな。まあ東さんの名前は出さ無いが。

「俺もとある事情で白式のデータを録ってこいって言われててな。」

「へえ……。」

聞いた話によると第四世代開発の糧となるらしい。

第四世代となると未だ机上の空論とされている”パッケージ換装を必要としない万能型”。流石東さん、天才だ。そういう意味ではMr・デュノアの目のつけどころも悪くは無いのかもしれない。

「ま、そんなの後からどうにでもなる話だ。問題はお前だ、シャルル。お前はどう生きていきたい？」

「そ、それは……」

「一生Mr・デュノアのお人形さんか？」

「嫌だよ！でも……」

「生き方は、自分で決めるものだ。俺は口出ししない。それに、誰

にも拘束されたりなんて、あつてはいけない。」

人権は誰にだつてあるものだ。人種だつて、血縁だつて関係ない。

「・・・僕は、僕はどうしたら良いのかな？こんなに簡単に、データも取れないまま女の子ってバレちゃうし・・・」

「そうだな・・・。一つ例をあげるなら・・・」

シャルルはじつと俺を見つめている。

「親と離れて、セスタフラックスに来れば、俺が研究助手としてこき使つてやる」

「どつという意味？」

「ここだけの話、俺は自分のISを設計した」

「ええ！？」

「あくまでもこれは一例だ。まあ選ぶのはお前だ。それに・・・」

「それに？」

「特記事項第二十一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする。要するに三年間はのんびり考えられるのさ。」

「・・・よく覚えられたね。特記事項つて五十五もあるのに」

「別にあんな本、量子転換してISに詰め込んでいつでも見れるようにすれば問題ない。俺のISの待機状態はこのメガネだ。カンペだよ、カンペ。」

「ふっ、あははっ！そうだったんだ！」

ふう、やっと笑ったぜ。やっぱり女の子は笑顔が一番だわ。

「という訳だ。ゆっくりかंगाえていつてね」

「うん。そうするよ」

だが、災難とは何時来るかわからないものである。

コンコン

「！？」

「真咲？シャロ君？居る？晩御飯良いの？」

「そうですねよ。一日の健康の糧は食事にもあるんですから」

「ユウ・・・じじくせい」

どうしてこうなった。星とユウだ。まずいよ、バレたらまずいYO！

「真咲？入るよ？」

逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ！とにかく、応戦を！

「ど、どうしようっ？」

「ええっと、ベッドだ！布団に潜れ！」

「あ、ああっ、そっか！」

バタバタしてるよ！ゆっくりしてられない！

ガチャ。

「よ、よお星！なんだ？どうした？」

「・・・何を慌ててるんですか？」

絵的にはベッドに飛び込んだシャルルに上から布団をかける形で俺が乗っかっている。

「ま、まさか、そっちの趣味が！？」

「あるわけ無いだろ！シャルルがなんだか風っぽいって言うからさ」

「しゅ、ごほっごほっ」

「「「・・・」」」

え、何か間違えた？選択肢ミスった？何この沈黙。今日は沈黙に縁があるなあ。

「ユウ、ドアの鍵閉めて」

「えっ？あつ、はい」

「「！！？？」」

ガチャン

「嘘つかなくて良いのよ？シャロちゃん」

「えっ！？な、ナンノコトカナ。ごほっごほっ」

「私が何でシャロってあだ名つけたか知りたい？簡単よ。あなたの名前がシャルロット・デュノアだったからよ」

「「な、なんだって！？」」

「やっぱりですか・・・。」

ニコニコ顔してるよこいつ！しかも若干ドヤツてるよ！

「私に隠し事は通用しないわよ！だから大人しく・・・」

ゴクリ

思わず生唾を飲んでしまった。

「私に胸を揉まれなさい！」クワァッ！

「黙れ！変態！」

「減るものじゃあるまいし！」

「考え方が根本から間違ってるよ！」

「ええい！控えい控えい！」

「セリフ間違つとるわ！」

この騒動は、近隣住人から苦情が来るまで戦って落ち着いたあと、星が晩御飯を作ってくれた。その上シャルルが箸を使えないことが判明し、俺があーんで食べさせてやったのを星がニヤニヤしながら見て、ユウが空気になって終わった。

え？バニーちゃんのくだり？

バニーちゃんはアリーナのカタパルトの上に立ってぶつぶつ独り言を言っていました。終わり。

第八話 シャルル「僕はね・・・」(後書き)

もう少し・・・もう少しで書きたい回に・・・。

感想随時受け付けております！

第九話 KOT（キングオブ唐変木）の片鱗（前書き）

感想は随時受付ておりますぞー！色々と指摘してくださいませ。

第九話 KOT（キングオブ唐変木）の片鱗

Side Masaki

IS学園1-1教室前廊下

「そ、それは本当ですよ!？」

「う、ウソはついてないでしょうね!？」

月曜日の朝、俺は廊下まで聞こえる声に驚いた。

「なんなんだ、今のは？」

「さあ？」

隣には貴公子とかいてエンジェルと読むシャルルが居る。

「本当だつてば!この噂、学園で持ちきりなのよ?月末の学年別ト
ーナメントで優勝したら織斑君と交際できー」

アホらしい話だ。俺も聞いたことがあるが、調べてみると真実は悲
しいものだったな・・・。
だが、ここは酷だが真実は伝えるべきだろう?ほら、箒が困ってる。
それにまだ一夏が来るには早いしな。

「ーるのは、箒だけだぜ?」

『智沢君!?!どうゆうこと!?!?』

本当に知らなかったんだな……。こら箒、期待の眼差しでこつち見んな。

「これは、いつかは知らないが一夏に箒が持ちかけた話だ。それに、そんなことで一夏が簡単に落ちるわけないだろ？唐変木と世界最強の姉的な意味で」

『で、でもっ！』

「それに、自分の口で伝えないで無条件に交際できるなんて、相手の事を考えない最低な話じゃないか。当たって砕けるよ、バーカ」

『ぐぬぬ……。』

「おはよう！……。あれ？どうしたんだ？」

悔しがる空気をぶち壊してやって来たのは当の本人である一夏だった。

「おはよう一夏。そうだね……。恋に破れた女たちってところかな？」

「シャルル、訳がわからないぞ？」

「だって、ねえ、真咲？」

「ああ、それ以外に表現できないな」

「？」

『学年別トーナメントで私が優勝したら付き合って!!』

「はあ!?!何でそうなるんだよ!!」

「あはは・・・」

みる、シャルルが戸惑って居るぞ!

しかし、キングオブ唐変木(KOT)の一夏はこう返した!

「俺は、別に構わないが・・・」

「「「一夏あ!?!」」」

俺、シャルル、筈が驚く。いや、むしろ当然の反応だろと思うが。

『本当!?!やったあ!!』

「お、俺は嫌だからな!?!な!?!シャルル!!」

シャルルに助けを求めよう。

「・・・えっ!?!ああ!?!うんうん!僕もダメだよ!」

なんだろうか。一瞬間があつた気がするの。

『えー・・・』

「えーじゃあ無えよ!さっきの話聞いてただろうが!?!っーか一夏

「！こっち来い！」

ガシッ！

首根っこを掴んでズルズルと引つ張る。

「やめる真咲！自分で歩くから！」

「黙れ！」

とそこにちーさん・・・じゃなかった織斑先生がやって来る。

「何をしているお前たち。もうすぐSHRだぞ？」

「一夏君と将来について語り合って来るので遅れます！」

「そんなのいつでもできるだろうが。」

くっ……。さすがにはいそうですねかとは行かないか……。だから織斑先生にこうささやいた。

「（一夏をどこぞの馬の骨かわからない女に取られて良いんですか？）」

「！？」

明らかに顔つきが変わったな。さすがシスK・・・いや、素晴らし
い兄弟愛。

「ゴホン！ならば仕方ないな！わかった。だが、長くなるなよ？」

「了解しましたっ！ほら、行くぞ一夏！」

「だから、自分で歩けるって!!」

ズルズルと引っ張っていく。

話し合いの結果？決まってるだろ。買い物か何かと勘違いしてたよ。まあKOTの一夏なら当たり前前っちゃ当たり前前だったが。

だが、さすがにそれでは頑張った箒が浮かばれないから、箒だけは恋人的な意味でって言ったら動揺しながら否定した。アホか。向こうは好意バリバリやぞ。。。

さすがにそこまでツッコむ力がなかった。すまん、篠ノ之姉妹・。。。

77

昼休み

「ま、真咲！」

「あ？」

箒が話しかけてきた。

「今朝は、その、感謝している」

「お前、相変わらず普通にありがとっつて言え無えのか？」

「なっ……！まだ覚えていたのか!？」

「生憎、記憶力は良いんでな」

「……また、貸しを作ってしまったな」

まだ引きずってたのか。もういっつつか冗談だったのに。

「あ……あれはどうでもいいぞ？」

「それでは、その……武士として、私が困るのだ！」

お前、女だろ……。

「だから……!」

「言ったじゃねえか。貸しなんて考えるな。貸した覚えなんて無えよ」

「だが……!」

しつこいな……はあ……。

「わかったよ。じゃあ……強くなれ。本当の意味で」

「……そんなので良いのか？」

「おいそれとは出来ないだろ？お前は一回道を外れてるんだ。」

「・・・」

「一時期こいつの強さは相手を泣かすだけ、憂さ晴らしになってたからな。なおすのが大変だった。」

「あと、早いところ一夏とくつついてくれ」

「な、ななな、何を言っているのだ!」／／／

「それ以外はまだ望まねえよ。じゃな」

「お、おい!」

「諦め切れない奴だな、つたく・・・。」

「お前は美人なんだ自信持て。一夏もそう言ってたぞ」

「い、一夏が・・・?」

「ボシュツと箒が真っ赤になる。」

「実際、朝も」

「あんな綺麗な奴が俺なんかには好意を持つかよ!」

「つて一夏が否定してたしな。」

「じゃあな、頑張れよ」

「あ、ああ」

という訳で、そんな筈を置いて一人学食に行く俺だったとさ。

第十話 ブルーデイズノレッドスイッチ - 1 (前書き)

感想は随時受け付けておりますぞー！

第十話 ブルーデイズ/レッドスイッチ - 1

Side Masaki

第三アリーナに行く道のり

「一夏、今日もやんのか？」

「ああ、俺にはまだまだ鍛練が足りないからな。今日はええとー」

「第三アリーナが使えるぞ」

「「わあっ!?!」」

シャルルと一夏は何を驚いているんだ？さっきからいたじゃないか。

「おう、箒。終わったのか？」

「ああ。先生が近くにいたからな。早く方がついた」

今日の日直は箒だった。ルーム日誌を提出しにいったんだが、どうも先生が近くに居たので提出してきたようだ。

「ともかく、だ。第三アリーナへと向かうぞ。今日は使用人数が少ないと聞いている。空いているなら模擬戦も可能だろう」

俺たちがアリーナに向かっていると何やら慌ただしい様子が伝わってくる。

特殊なエネルギーシールドで隔離されたステージからこっちに爆発が来ることは無いが、こっちの声も向こうには届かない。

爆発の中心には『シユヴァルツエア・レーゲン』を駆るバニーちゃんが出た。

さらに、鈴餅とオルコットのISは目視できる限りでも二機ともBクラスダメージを受けている。

「な、なんだよこれ・・・」

気がつくのと隣にいた一夏が声を漏らした。

再び戦闘が開始される。鈴餅、オルコットVSバニーちゃんのように。

しかし、明らかに強さの差は歴然。完全にバニーちゃんが勝っている。

この三人か・・・。バニーちゃんが一夏を誘き出したのか？あり得るなら、多分、一夏の悪口やISをバカにしたんだろ。そうじゃなかったら、あんなにむきにならないだろうな、あの二人は。

って、おい！その距離でミサイルは自殺行為だ！

言わんこつちやない。爆発に巻き込まれ・・・ん？今のバニーちゃんの光・・・。

「まさか・・・AICか!？」

「AIC・・・?なんだそれ？」

「一夏!のんびりしてる場合じゃねえ!零落白夜でこのシールドを

ぶった切れ!」

「はあ!? そんなことしたらー」

「お前はダチを見捨てんのか!? 鈴餅とオルコットがどうなっても良いのか!？」

「!! わかった! 来い、白式!」

一夏は白式を展開させ、零落白夜を発動させ、一気にシールドを叩ききる。

そのまま瞬時加速でバニーちゃんに突っ込む。

これは賭けでもある。

アクティブ・イナード・キャンセル
AIC、慣性停止能力は確かに相手を止める事ができるが、空間圧作用兵器に似たようなエネルギーを使用するため、零落白夜なら切り裂ける。

ただ、そこまでの腕が一夏に無いのはわかっているので、8:2で劣勢なのである。

「ふん・・・感情的で直接的、絵にかいたような愚図だな」

やはり、AICで腕を止められる一夏。

そこにシャルルの弾雨がバニーちゃんに降り注ぐ。
やっぱり第三世代型らしく、AICは意識を集中しないと使えないか・・・。

「くっこんなときに、『ヴェント』が正式に使えれば!」

実際、俺の専用機『ヴェント』は本国ギリシャから届いていてすで

に最適化もすませている。

ただ、なぜかまだ国からの使用許可がないんだ。

だから歯痒くてしょうがない。くそっ……！

「面白い。世代差というものを見せつけてやるっ」

一夏とバニーちゃんが向かい合う。

「行くぞ……！」

「くっ！」

ラウラがまさに飛び出そうとしたその瞬間、二人の間に影が割り入ってきた。

ガキンツッ！

金属同士が激しくぶつかり合う音が響いて、バニーはその影に加速を中断させられる。

「……やれやれ、ドイツ特殊部隊最強の名が泣くわね。ただの弱い者いじめじゃない」

『……』

そのISは、“少し青みがかった白銀”のISだった。その美しさは人を魅了し、同時に危機感を覚えさせる。

「こんな雑魚をいたぶるより、この指名手配ISの首を本国に持ち帰ったが良いんじゃないの？」

そして、白銀のISの操縦者はこう言い放った。

「**颯爽登場！銀星！**シルバースターさあ、アゲて行こうかあ！」

もちろん、どこか聞き覚えのある声で。

第十一話 ブルーデイズノレッドスイッチ - 2

Side Masaki

「颯爽登場！銀星シルバースター！さあ、アゲて行こうかあ！」

そう言つて銀星は刀・・・いや、剣を構え直す。
バニーちゃんは当然、シャルルすら臨戦体勢である。

「貴様の様な犯罪者に遅れを取る私ではない」

「ふん。ま、やり合えばわかるよ」

互いが動かさず間合いが変わらない。

沈黙を先に破つたのはバニーちゃんだった。

二本のワイヤーブレードが同時にかつ正確に銀星めがけて飛んでいく。おそらく一夏達なら確実に当たっているだろう。

だが、それを剣で払う銀星。

そこまでは普通だった。

まばたきをした瞬間、銀星はシュヴァルツエア・レーゲンの背後に回っていた。

剣を首もとに突き立てている。

「詰みだよ。何処を狙っているのさ」

「くっ！」

バニーちゃんの表情が一瞬で強張る。銀星はフェイスマスク（とは

言っても口と鼻の周りが隠れてないが）をしているため表情が全く読み取れない。

そしてバニーちゃんは振り向きざまにAICを放つ。こんな避けろって言う方が無理だ。

しかし銀星はやってのけた。

後方に瞬時加速で。

「AICねえ。データで見たときの方が強そうだったんだけど」

そう言いながら、銀星は剣を捨てた。そして離れているのに殴る構えを取る。

「貴様はバカか？AICで止められるのだぞ？」

「やれるものならやってみなさい。貴方は銀星のスピードについていけないから」

「ほざけ！」

バニーちゃんがAICを発動させる。

しかし銀星は瞬時加速で、更にあり得ない軌道で一気に迫る。

「詰みよ！」

銀星が一発殴る。見事にヒットする。

同時にシュヴァルツエア・レーゲンの展開がなぜか解かれる。明らかにまだまだシールドエネルギーはあるはずなのに。

バニーちゃんは呆然として立っている。どうやら自分の意思ではないようだ。

「さて、次は誰？」

銀星は先ほど捨てた剣を拾って構え直す。

「君？それともい・・・君？」

シャルル、一夏の順に剣先を向ける。

そこで、生氣を取り戻したバニーがプラズマ刃を展開させ、銀星の背後から切りかかる。

ガキンツ！

その攻撃はまたもや止められた。しかし銀星にはない。

「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬姉！？」

それが、織斑千冬に止められたのだ。一夏がすつとんきょうな声を出すのも頷ける。

更にいつものスーツ姿かつISを展開させてない。しかしその手に持っているのはIS用の接近ブレードであり、170センチはある長大なそれを軽々と扱っている。その上での今の横やりだから、つくづく常人離れしている。

「模擬戦をやるのは構わん。Iが、アリーナのバリアーまで破壊する事態にならねば教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」

素直に頷いて、バニーちゃんはISの装着状態を解除する。アーマーが光の粒子へと変換され弾けて消えた。

「織斑、デユノア、お前たちもそれでいいな？」

「あ、ああ・・・」

「教師には『はい』と答える、馬鹿者」

「は、はい!」

一夏、素に戻るな・・・。

「僕もそれで構いません」

返事をし直す一夏にシャルルも追従する。

その言葉を聞いて、ちーさんは改めて、すべての生徒に向けて言った。

「では、学年別トーナメントまでの私闘を一切禁止する。解散!」
「パンツ!とちーさんが強く手を叩く。それはまるで銃声のように鋭く響いた。」

「それで織斑先生。銀星についてはどうするんです?」

俺は周りの生徒が帰るのを横目に織斑先生に聞いた。
ちなみに銀星だけまだ展開を解いていない。

「とりあえず鳳とオルコットを保健室に連れていけ。話しは本人からしてくれるだろう」

「わかりました」

と言っわけで今駆けつけたユウと他の専用機持ち（もちろんバンニは除く）で鈴餅とオルコットを保健室に運んだ。

第十一話　ブルーデイズ/レッドスイッチ　- 2 (後書き)

水蓮寺「こんな展開、誰が予想しただろうか！」

星「多分多いと思うよ。」

水蓮寺「なん・・・だと・・・。」

第十二話 保健室なう

Side Masaki

IS学園保健室

「・・・」

「・・・」

時間はさっきの一件から一時間が経過していた。ベッドの上では打撲と他切り傷等の治療を受けて包帯を巻かれた鈴餅とオルコットがむすーっとした顔で視線をあらぬ方向に向けていた。

「別に助けられなくて良かったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

「そうだが、そんなに誉めてもなにもでないぜ？」

「あなた（智沢さん）は何もしてない上に、誉めてなー」

「いたたたっ！」

「つつっ！」

アホかこいつら…。いやバカなの？死ぬの？

「アホでもバカでも死にもしないわよっ！バカ真咲！」

「一夏さんに智沢さんもバカですわ！」

心を読むな！貴様らニュータィ（ry

だが、ここまで反撃出来るってのは相当な空元気だよな？一夏が居るからか？それ以外に理由がないな。

「好きな人に格好悪いところ見られたから、恥ずかしいんだよ」

「全く、意地張って…」

「ん？」

シャルルとユウが飲み物を買って帰ってきた。

「ななな何を言っているのか全っ然っわかんないわね！こここここれだから欧州人は困るのよ！」

「べべっ別に私はっ！そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」

よかったな。一夏がKOTのおかげで告白に気づいてないぞ。

「はい、烏龍茶と紅茶です。とりあえず飲んで落ち着いてください、ね？」

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですが、いただききましようっ！」

慣れた手つきだな、ユウ。つか、俺も紅茶飲みたい…。

「はい、真咲。紅茶です」

「待ってました！」

「ぐくぐく…。」

「うまい！」

「あはは。真咲は本当に紅茶好きなんだね」

「誉めてもなにもでないぜ、シャルル」

紅茶イイネ！

「ま、先生も落ち着いたら帰って良いって言ってるし、少し休ー」

トトトトトトトトトトトト…！

「な、何の音だ？」

「一夏、この音、嫌な予感がするぜ…。」

バーン！

おい！？扉吹っ飛んだぞ！良いのか？

「織斑君！」

「デュノア君！」

「智沢君！」

「六音君！」

入って、キター！はどうでも良いな。雪崩みたいに入って来たな。おかげで保健室の人口密度が高くなったぞ。つか扉総スルーですか。

「な、な、何なんですか？」

「ちよつ、お前ら落ち着け」

「『『『これ！』『』『』」

は？なんか紙見せられたぞ。

「な、なにになに…？」

「『今月開催される学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦を行うため、二名一組での参加を必須とする。なお、ペアができなかった者は抽選でペアを決める。締め切りは』」

「そこまでで良いから！とにかくっ！」

一斉に延びてくる手。あ、これ、やり方変えればムゲン・ザ・ハン

ド・・・もとい千手観音だな。

「私と組もう、織斑くん！」

「私と組んで、デユノアくん！」

「私とやろう、智沢くん！」

「可愛がるよ、六音くん！」

一人だけ趣旨が違うぞおい。

そうか、さっきの一件で万が一の為にペアにしたのか。トリオでもいい気がするんだが。

とりあえず、答えは決まっている。これはさっき決めたんだよな。実はこの事はさっき星から聞いたんだよ。だから対策をとらせてもらったぜ。

「……だが、断る！」

『えーっ!?!?』

ここから、男子四人（正確には男三人女一人だが）の華麗なる連携をとくと見よ！

「俺と」「僕」

「ボクと」「俺で」

「」「」「ペアを組むから！」「」「」

「諦める！」

「あ、諦めてね？」

「諦めてください」

「諦めてくれ！」

「まあそう言うことなら・・・」

「他の女子と組まれるよりは良いし・・・」

「男同士って言うのも良いオカズになるし・・・」

「と言って帰っていった。

「諦めが早い上に、連携にはツツコミ放置。ひでえ。

「しかも最後のやつ。お前腐女子だな。」

「一夏っ！」

「一夏さんっ！」

「あ、こいつら忘れてた。」

「あたしと組みなさいよ！幼馴染みでしょ！？」

「いえ、クラスメイトとしてここはわたくしと！」

元気だな。

「ダメですよ」

ここでニューカマー、天河星の登場だあ！

「二人のIS、さっき聞いてきたけど、ダメージレベルがCを超えているそうです。修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ」

「うっ、ぐっ……！な、なら仕方ないわね」

「不本意ですが……非常に、ひっじょーにつ不本意ですが！トーナメント参加は辞退しますわ……」

あ、一夏がワケわからんって顔してる。

「一夏、IS基礎理論、蓄積経験の注意事項三つ目だ」

「は？」

「要するに、ISは経験値から自己進化するけど、どんなときでも経験値はたまるから、壊れたまま使ったら、変に進化するかもねって話だ。」

「なるほどなるほど」

本当にわかってるのか、コイツ……。

「で、何でバニーちゃんとバトってたんだ？」

「えっ、いや、その……」

「女のプライドを侮辱されたら、ですわね」

うっわ。わかりやすっ！

何この乙女達は！

「ああ、もしかして「k」

「あああっ！デュノアは一言多いわねえ！」

「そ、そうですわ！まったくです！おほほほほ！」

アホだ。しかし、苦しそうなシャルルを見過ごす訳にいかない。

「やめんかお前ら」

と鈴餅とオルコットの肩を指でつつく。

「「「びぐっ！」「」

アメーバって言えば良かった！

つかザマー！プギヤー！無理するからそんな体になるんだ！

「ま、まさきい……あんだねえ……」

「あ、あと、で……おぼえてらっしやい……」

うわぁ……。これは酷い。早くなんとかしないと……。

「と言うか、銀星の話はどうなったの？」

『あ』

シャルルの一言に場が氷ついた。

「それに関してはー」

そこで口を開いたのは。

「私から説明します」

他でもない。星だった。

第十二話 保健室なう（後書き）

二話かくと疲れる上に話が進んでない！面白く書こうとしすぎた！
べじじじよじじ。。。。。

第十三話 銀星の正体

Side Masaki

「それに関しては私が説明します」

「星？どうゆうことだ？」

「織斑先生から一任されてるんだよ一兄ちゃん」

「なるほどなるほど」

お前好きだなそれ。

「でも、何で星が？」

おう、鈴餅復活早いな。

「簡単ですよ。だって私が銀星なんですから」

。。。。

沈黙ですねわかります。

『は？』

聞き返すのか。

「私が銀星なんです。私が銀星なんです。重要な事だから二回続けて言いました」

・・・。

二回目。

『はああああ！！！！？？？？』

あ、俺とユウは東チルドレンだから知ってたからな。

「ちっ、ちよっと！どづいづことなのよ！」

「訳がわかりませんわ！」

「え？星ちゃんが、銀星？」

「俺の義妹は有名だな」

「一夏、暢気だなお前は・・・」

「信用無いなあ。これでどうですか？」

と言って気がつけば俺の背後にまわって先ほど銀星が展開していた剣の刃が俺の首もとにある。
だが、こいつも生身だ。

シャルル達が警戒体制に入る。当たり前っっちゃ当たり前だが。

「別に殺しも傷付けもしませんよ。わかったでしょ？」

警戒を少し緩める。

「これだけ見せつけられたら、ねえ？」

「え、ええ。ISも展開せずにこの速さ……」

「捕まえなきゃいけないんだろうけど、無理だよね……」

と鈴餅、オルコット、シャルルは顔を見合わせる。

星、ドヤるな。

「ちなみに、私が破壊した施設はどれも非人道的、ISの軍事利用を考えていた施設ばかりなんですよ。指名手配にされる覚えは無いのです」

「例えば？」

やめいシャルル。聞かない方が身のための気が……。

「薬による人間改造、まあ薬以外にもありましたけど。他にはいかにISで人が殺せるかとか。そこいらじゅうに死体が転がってましたね。あとは……」

「もういい、星」

一夏が止めにはいる。珍しいな。

「養子になったとは言え、俺や千冬姉に連絡も入れずにそんなことやってたのか……」

「そんなことって!」

「俺や千冬姉がどれだけ心配したと思ってるんだ!？」

「っ!」

「連絡一つ寄越さないで、こっちからやっても音信不通、新年会、俺や千冬姉の誕生日にも顔を出さない、あげくの果ては天河さん家にいないだど!?!ふざけるのも大概にしろ!?!?!?!」

「一兄さん……」

「お前が正義感溢れるやつで、曲がった事が許せないやつだって事くらい知ってる。だけど、せめて連絡の一つぐらい寄越せよ、バカ……」

「ごめん、なさい……」

「まったく、あんなに華奢だったお前が、気がつけば俺より強くなりやがって……」

「ごめんなさい……」

「おかえり、星……」

「ただい、ま、一兄さん……うわあああん!?!?!?!」

泣き出してしまった。泣いた星を見るのは初めてだ。

「うわあああん!?!?!?!」

「よしよし……」

泣いている星をそっと抱き寄せる一夏。

いやあ、素晴らしい兄妹愛だねえ……。

「うう……ぐすつ……」

「あ、あー、ごほん。話し合いは終わったか？」

「あ、織斑先生」

ぶっ飛んだドアの無い保健室の入り口に織斑先生が立っていた。

「お前ら夕飯時だぞ。良いのか？」

ぐぎゅるうう〜。

『……／／』

「飯と聞いてお前ら全員腹がなるとは。フッハハハハハ！」

『笑わないでください！』

しばらく笑い転げる織斑先生。どんだけツボったんだよ……。

「ほら、さつさと食堂に行け。今日は解散だ」

『はい』

そうやって鈴餅とオルコット以外が保健室を出る。

「天河」

「はい、ぐすつ。なんでしょう、織斑先生」

「銀星の学園内使用を正式に許可する」

「ぐすつ。うえっ、わかりました・・・」

「よし、ほら行け」

「はい・・・」

自室

「あんなことになるなんて」

「ああ俺も驚いた」

夕食後部屋に戻った俺とシャルル。

「あ、あのね、真咲っ」

「あ？」

「あの、遅くなっちゃったけど・・・助けてくれてありがとう」

「何を言って・・・」

「ほら保健室で。トーナメントのペアのー」

「あー、アレか。事情を知ってるのは俺とユウだけだし、一夏は俺のスタイルに合わせられないしな。あ、貸しとかそんなんじや無いからな！」

「わかってるよ。真咲はやさしいね」

「ところで、その男口調なんだが・・・」

「えっ？やっぱり、似合ってるない？」

「ああ、いや、そうじゃなくて、やっぱり自然に出てくるものなんだなって思ってる」

「直した方が良いかな？」

「別に直す必要は無いんじゃないか？もう既にシャルルの魅力の一つになってるしな」

「ふえっ！？魅力!？」

あれ？間違ったこと言ったか？

「そっか・・・そうなんだあ・・・じゃあ別に良いかな」

なんか上機嫌。

「じゃあ着替えるか」

「うん」

こついつ時、仕切りって便利だよな。各相部屋にある仕切り。気にせずに着替えられる。うん、気にせずに・・・

う・・・なんか甘い匂いがする・・・。

って何考えてんだ俺は！落ち着け、落ち着け、心頭滅却すれば火もまた涼しいだ！

ってそんなこと意識したら余計に！

「うわあああ！！！」

「どうしたの真咲！？ハンサムエスケープしてるよ！」

仕切りを越えてこつちを見ようとするシャルル。

「いかん、駄目だ！来てはいかん！」

「何で！？」

「これは、俺の戦いなんだ！」

「真咲落ち着いて！」

後ろからぎゅってされる。しかも下着なのか肌の温かさがリアルに伝わってくる。

「ってそれじゃいかんだろおお！！！！！」

自分で自分を止められない。やけになってシャルルにルパンダーイ

ブ！

「うわああああ！?!?!?」

どがすっ！！

シャルルの右ストレートがもろにみぞおちに入る。
そして、目の前が真っ暗になった。

sideCharlotte

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

真咲、普通に寝てるや・・・。

ちよつとやり過ぎちゃったかな？

いやいや、真咲が飛びかかってきたのが悪いんだよ！うん！

「真咲つてば、意外と大胆なんだから・・・」

でも、その前に下着で抱きついたのは、我ながら大胆だったね・・・。

うう・・・失敗したな・・・。

真咲、怒って無いかな・・・？

こうなっちゃったのは僕にも一応責任があるわけだし・・・。

『研究助手にしてやる』

真咲なりの気遣いだったんだよね。もうちょっと気が利いたセリフは無かったのかな？例えば、ここにいれればいい、とか……。でも捉え方次第では、そばにいろって事なのかな？

「ほんと、真咲はやさしいね」

父の命令で来た時は、こんな感情なかったのに。

どうしてこんなに真咲は僕の心を揺り動かすのかな……。

きっと、いやたぶんだけど、この甘酸っぱいようなよくわからない感情が、恋、って言うものなのかな？

あ、今多分顔真っ赤だ。真咲起きてなくて良かった。

「真咲のバカ……」

そして、僕は何でかはわからないけど、そっと真咲の額にキスをしてみました。

「おやすみ、真咲……。」

うう。やっちゃったやっちゃった！ふえー！暑い！寝よう。うん、寝よう！

そのあと暫く寝れなかったんだよね……。

第十三話 銀星の正体（後書き）

水蓮寺「まあなんとなくわかってたでしょうけど、一応」

星「多分・・・一話の時点で気づいてる人多いよ?」

水蓮寺「なん・・・だと・・・」

六音「感想お待ちしております。というかKHK、感想、早く、書け」

真咲「そおい!そんなんで来るか!つかパクリ!」

第十四話 トーナメント、始まるザマスよ！（前書き）

水蓮寺「始めに言います。手抜き回です」

天河「いつもじゃん」

水蓮寺「……。」

智沢「ゆっくりみていってね」

第十四話 トーナメント、始まるザマスよ！

Side Masaki

第三アリーナ

「なあ、マジでやるのか？」

「当たり前でしょ？何言ってるの？」

今日はトーナメント初日

になったばかり、つまり深夜0時である。

星曰く

・トーナメントまでって事は初日の深夜は私闘OKよね！
バカかこいつは。

「星、眠いのですが・・・」

「まあ、ヴェントと蒼柳の試運転ができるんだから良いじゃない！
私も試したいパッケージがあるんだ」

お構い無し。

良いのか？

「なあに、遅くても30分で片をつけるわ。気にしなくても相討ち
か私に負けるだけだし」

「誰が相討ちなんて！」

なんだと？ぐぬぬ……。

「あら、やる気あるみたいね。じゃあ早速始めましょう。さあ来い！シルバー！」

「ちっ、やってやんよ。来い！風見！」
ヴェント

「ふっ……行きます！蒼柳！」

三人揃ってISを展開する。

星のISは頭部とブースターはそのままだが、他はすべて変わっている。

「星、なんだそれ」

両手はガンナツクルみたいに腕にリボルバーがあり、さらに本人はマントをしている。

「極接近戦闘用パッケージ「星羅」せいらよ。かつこよくない？」

ジャキッ！

ってサムズアップされてもな……。

「このパッケージのコンセプトは『足りない分は勇気で補えばいい』よ」

「にしてはそこまでかつこよく無いな」

「知ってるわよ。だってオーストラリアそこまで財力無いもん……」

「

ああ、なんかやつちまった感じが……。

「ユウのは……安定型ね。なんか『黒騎士』みたいね」

「そ、そうですね」

なんか歯切れ悪いな。
ま、良いや。

「で、真味のは……射撃特化型みたいですね」

「ああ、そうだ。ま、細かい事は良いからさっさと始めようや」

早く帰って寝たい。
それ以外に望みません。

「じゃあいくわよ。」

『3!』

三人でカウントダウン。

『2!』

マジ寝たい。

『1!』

早く……

『スタート!』

寝たい!

結局、五分後に織斑先生が来て説教後、試運転は終わった。

反省文は、無かったので、さっさと寝る事にした。

戦闘シーン?それは次の回かな

*

六月の最終週、つまり今日から一週間は学年別トーナメント一色に変わった。

ちなみに例の如く星の姿は見当たらない。仕事は無いはずだがな。。。

「しかし、すごいなこりゃ・・・」

「一夏。多分ここ（IS学園）の行事って全部こんな感じなんだろ
うぜ」

「まあそれはそうなんだが、こっつ、ピリピリとした空気がな?」

「あー・・・」

なるほど、よくわかった。

「三年生にはスカウト、二年生には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ていますからね」

「一年生のトーナメント上位者には、早速チェックが入ると思うよ」

「ふーん、ご苦労なこった」

興味ないな。うん。

「一夏、あんまり根詰めんなよ？」

「わかつてはいるんだけどな・・・」

「一夏はボーデヴィツヒさんとの対戦だけが気になるみたいだね」

「まあ、な」

やっぱりか・・・。

「一夏」

「なんだ真咲」

「何があっても、落ち着いて行けよ？」

「なんだよいきなり」

「怒りや焦りは人の持っている能力を下げる。どっしりと構えて、自分を信じる。特にバニー戦ではな」

「ああ、わかった」

本当に大丈夫かはわからんが、まあユウがペアだしな。大丈夫だ。

「そろそろ対戦表が決まるはずだよな」

どういう理由かは知らないが、ペア戦に変更になったとたんにシステムが昨日しなくなっただと。

で今朝から手作り抽選クジを先生と生徒で作る筈だった。

後はわかるだろ？反省文がなくなった理由。

早朝から作ってたんだよ、三人で。地獄を見たぜ……。

「真咲？顔色悪いよ？」

「ああ。大丈夫だ、問題ない」

「そう？なら良いけど。無理はしないでね」

「任せておけ」

そうこうしてたら対戦表が大型液晶モニターに表示された。

「俺とシャルルは……一年の部、Bブロック一回戦三組目か。――夏達は？」

「一年の部、Aブロック一組目だ」

「おお。早いな」

「ま、待ち時間考えなくて済むしな」

「出たところ勝負な一夏らしいぜ」

「誉め言葉として受け取っておくぜ」

「あ、対戦相手が決まったみたいですね」

ユウの言葉でまたモニターに視線が行く。

「ーえ？」

一回戦、織斑・六音ペアの対戦相手はヴォーデヴィッヒ・篠ノ之ペアだった。

ま、予想通りっちゃ予想通りだが。

「ま、こうなったら仕方がないだろ」

「一夏君は前向きですね」

「まあな」

一夏は落ち着いている。早速さっきの忠告を実践しているようだ。いや、出たところ勝負の勢いをそのままぶつけて倒すっていう自信の現れか？

どっちでも良いが。

「じゃあ、行ってくるぜ」

「一夏」

俺はアリーナに向かいかけた一夏を呼び止めた。

「なんだ？」

ニカツと笑ってこう告げる。

「決勝で会おうぜ！」

「ああ！」

一夏は力強い返事を返してくれた。

第十四話 トーナメント、始まるザマスよ！（後書き）

水蓮寺「必殺、織斑先生を出していざこざを解決させよう！

」

千冬「作者、こっちに來い」

水蓮寺「ひぎゃあ（略）

（作者制裁中・・・）

第十五話 ファインド・アウト・マイ・マインド（前書き）

やっと武器の名前決まった。友人のアイデアを元に（半分くらいないがしろにしてしまったか）決めました。

しかも長いっす。

真咲「おい」

水蓮寺「はい、わかっています。戦闘描写なんてほとんどありません」

真咲「なら、わかるよな？」

その後、作者の行方を知るものはいない・・・

第十五話 ファインド・アウト・マイ・マインド

Side Masaki

アリーナ観客席

「あいつら大丈夫か」

「大丈夫だよ、きっと」

「だって、昨日の一夏……」

「それはいつちゃ駄目だよ」

AICならまだしもPICも知らなかったんだ。不安にもなるさ。試合開始まで後五、四、三、二、一開始。瞬間、一夏は瞬時加速、バニーはAIC発動体制。

「あー、一夏らしい攻撃だ。単調すぎる」

「まだIS動かして二ヶ月くらいしか経ってないんだし……」

「戦術は色んなところに隠れてるぜ？ゲームに恋、食事、勉強とか色々」

「それはそうだけど……」

やはりAICで止められる。そして大型レール砲の銃口が一夏に向けられる。

「あいつなりに意外性で攻めようとしたのかもな。ただわかりやすくしようがないが」

「でもユウなら・・・」

「ああ、完璧なタイミングでフオローに入る」

そこにユウがアンチビームマテリアルビット《檜霰》を両腕にマウントしたまま射撃。弾丸には爆破効果があるようだ。

「凄いよね。あつてまだ間もないのに」

「よく人を見てるやつだよ。器用過ぎるぜまったく・・・」

そしてハルバート《堇六》を展開し斬りかかる。

そこに割り込みつばぜり合いに持ち込む筈。

「へえ、筈なかなかやるな」

「なに、あんたたち、戦術解析？」

そこには相変わらず包帯巻いてる鈴餅とセシリー。

「二人とも大丈夫なの？」

「ええ、代表候補生は伊達じゃありませんでしたよ」

「ま、あたし達は出れないけど、皆がどんな戦い型をするのか気になつてね」

なるほどなるほど。

「で、本音は？」

「「一夏いさが心配だから」

「素直に最初からそう言いなよ二人とも……」

恋は怪我すら早く治す。恐るべし……。

「で、戦況は？」

「そうだな……。一言で言うと、一対一対二って感じが」

「何ですか、それ」

「百聞は一見にしかず。見てみるよ」

そう言って闘技場の方を指差す。タイミングよくバニーがワイヤーブレードで打鉄を掴まえて後ろに放り投げていた。しかし、それはユウの弾幕に気づけず硬直しているのを強制回避させた、というわけではなく、一夏との直線の間にあつて邪魔なのでどかした、といった感じである。

「なるほど……。ボーデヴィツヒは箒を仲間じゃなくて一夏を叩く上で邪魔な存在としか見てないわけね」

「ああ。箒なりに合わせようと頑張ってるんだがな。全部無駄になつてる」

「大変ですわね、箒さん……」

「でも勝ちを求めてるね。邪魔にならない程度に攻撃を入れてるみたいだし。何でかな？」

「そんなの簡単な理由じゃねえか。ほら、優勝したらっって」

「ああ、あの約束の件だね！」

「……あんたたち、それ、わざと言ってるの？」

「あーご、ごめんね。別にそんなつもりじゃなくて、その……」

「なんだったら、変わりに俺が付き合っつてやるつか？」

「結構ですわ！」

「ひ、必要ないわ！」

「即答かよ。そりゃあんまりだぜ、嬢ちゃん達よう……。あ、箒堕ちた」

箒が悔しそうにたたずんでいる。ドンマイ。

「ふーん。二対一で戦っつて寸法ね」

「それに第三世代型兵器は思考指向、つまり、そっちに集中しないとなにもできない兵器ばかりだからな。ひいてはAIC対策にもなるわけだ」

「よく考えてますわねえ・・・」

「ユウも伊達にセスタフラッグの後取りじゃないってことさ。観察眼も凄いだろうな。あれ？観察眼？」

「それを言うならカリスマ性よ、真咲」

「良いのか、それで」

「良いんじゃない？」

鈴餅、無い胸を張ってドヤるな。

「相変わらずねえ、ラウラお姉ちゃん」

「「星！」」

「「天河さん！」」

「来ちゃった」

そこには気がつけば星が居た。気配無かったぞおい。

「仕事が一段落したからね。飛んできたわ」

「へえ。で、何が相変わらずなんだ？」

「ラウラよ。なんか昔っから「強さ」を「攻撃力」と勘違いしてる節があるのよねえ」

「よくわかったな、一瞬見ただけで」

「まあね」

「どうしてご存知なんですか？」

「ち、ちふー姉が昔言ってたのよ」

なに動揺してんだこいつ。

「あ、零落白夜出した」

「勝負をかけるつもりなのかな？」

「まあそう上手くはいかないわよ」

「・・・戦いとは常に二手三手先を読んで行くものだけ」

「どうしたの？真咲」

「嫌な予感がする・・・」

「腕にこだわる必要はない。要はお前の動きを止められれば」

「ああ、なんだ。忘れているのか？それとも知らないのか？俺たちは」

「二人組なんですよ？」

「!?!」

今さら探しても遅いです。ゼロ距離で《檜霰》を六連射。レール砲爆散を確認しました。

「くっ……!」

「一夏君!」

「おう!」

勢いよく斬りかかる一夏君。

しかし、紙一重で零落白夜は消えてしまいました。

「残念だったな。限界までシールドエネルギーを消耗してはもう戦えまい!」

ボーデヴィツヒがプラズマ手刀を展開し一夏に迫る。

くっ、間に合ってください!

すぐさま瞬時加速で接近。同時に左腕のビットを収納しシールド《

「藜一」を左腕展開させ滑り込む。

「邪魔だあ！」

AICで止めに入られたら困る！

とはいっても、別にこうすれば問題ありません。

右腕の《飛雫》をボーデヴィツヒに射出。

《飛雫》が盾になり回避成功です。

「なっ!?!」

「だりゃああああ!?!?!」

そのままの勢いでボーデヴィツヒに飛び蹴りを加える。

面白いようにぶっ飛んで壁に叩きつけられるボーデヴィツヒ。

「ありがとう!ユウ！」

「まだです!」

そのまま《藜一》の中、からパイルバンカー・・・では無く、ヒートロッドをボーデヴィツヒめがけて放ち、束縛。そのまま手繰り寄せるついでに、《葦六》を左手に持ち変えて柄を短くもち、右手に雪片を真っ黒にした感じの接近ブレード《紫艶》を展開。

「!?!」

「これでとどめだあ!」

途中で束縛を解除し、慣性のまま引き寄せたボーデヴィツヒに《董六》と《紫艶》の連激を喰らわせる。

ガガガガガッ！

絶え間なく攻撃を与え続ける。

ボーデヴィツヒの体がゆっくりと傾き、機体に紫電が走り、IS強制解除の兆候を見せ始める。

勝った。

と思った次の瞬間、異変が起きたのです。

「あああああッ！！！！」

ボーデヴィツヒの絶叫と同時に激しい電撃が放たれボクは吹っ飛ばされる。

「ぐっ！一体何、が……」

「なっ！？」

ISが……シュヴァルツエア・レーゲンが、溶けて、どろどろになって、ボーデヴィツヒを呑み込んでいく！

「なんだよ、あれ……」

そして黒い全身装甲フルスキンのような何かを形作る。どこかで見たような何かを。

例えば、「モンド・グロツソ」とかで。

「《雪片》……!」

飛び出しそうになる一夏の腕を掴む。

「ダメです!一夏!感情の赴くままに動いてはいけません!」

「でも!」

「死んでも良いんですか!」

「ISだってあるんだ!」

「後一撃でも食らえば強制解除になるISが盾になりますか!?!
いえ、なるわけがありません!」

「くっ……。でも……。でもよお!」

「いい加減にしろよ!お前はあ!」

「ユウ!?!」

「落ち着いてください。怒りは判断力を低下させます」

「あ、ああ……」

「それで、なんだと言っただけ?わかるように説明しろ」

篠ノ之さんが優しく問いかけます。

「あいつ・・・あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉のものだ。千冬姉だけのものなんだよ・・・」

黒いIS・・・もといVTSで『暮桜』ヴァルキリートレースシステムをトレースしているシュヴアルツエア・レーゲンは微動だにしません。

「理由はわかりました。しかし、エネルギーも残ってない白式で何をするんですか？」

「ぐっ・・・！」

「それに、もう先生方が鎮圧してください。もう状況は收拾される」

「だから、いく必要はない、か？」

「そうだ」

「違う、違うぜ篤。俺が『やらなきゃいけない』じゃないんだ。俺が『やりたいからやる』んだ。他の奴とか知らん。大体、ここで引いたらそれはもう俺、織斑一夏じゃない」

「ええい、馬鹿者が！ならばどうするのだ！エネルギーはどのみち」

「無いなら他から持ってきてくれれば良いんですよね」

「ユウ・・・」

「普通のISでは無理ですが、ボクの蒼柳ならコア・バイパスでエネルギーを移せると思います」

「本当か！？だったら頼む！早速やってくれ！」

「が、移したところで零落白夜、更には白式の腕すら展開させるエネルギーは残ってないのもまた事実です」

「じゃあ・・・どうするんだ？」

「しばらくお待ちを」

そして、プライベートチャンネルを開く。
相手は、天河星。

『星』

『・・・許可はもう降りてるわ』

・・・は？

『アビリティートレーシングシステム
のATSを使うんでしょ？』

『えっ！？ええ、まあ』

『まあ、ラウラのがVTS発動したせいで客席防護壁が展開されて私達が手を出せない状況でもあるしね。念には念をとってやつで取っ
ておいて正解だったわ』

『あ、ありがとう・・・』

『その代わり!』

『え?』

『その代わり、ちゃんと帰ってきなさい。私、いいえ、みんなを悲しませる結末は絶対に許さないわよ?』

『・・・はい!』

プライベートチャンネルを切る。

「作戦は立てました。ボクが戦います」

「は?」

「勝ちます。だから、《雪片式型》を貸してください」

「六音?何を言って」

「・・・わかった」

「一夏!?!」

「ありがとうございます」

「その代わり、絶対帰ってこいよ?無傷でな」

「・・・あなた達兄弟は血は繋がってなくてもおんなじ事を言うんですね」

「？」

「まあ、いいです。では雪片をお借りします。」

「ああ、ほらよ」

「夏君から雪片を受けとります。」

「紫艶、接続回路解放。雪片と接続」

紫艶と雪片の柄を連結させ双天牙月のように双刃刀にします。
なぜそんな事ができるかって？

いいえ、これが、本来の、雪片と紫艶なんですよ？

「ATS、スタート」

声に反応するかのように確認ウィンドウが出てきます。確認ボタン
を押しウィンドウを消します。

「さあ、始めましょう。偽りの力と偽りの力の戦いを」

第十六話 VTS VS ATS (前書き)

いよいよ決着！果たしてその結末とは！？

第十六話 VTS VS ATS

Side Rokune

アリーナ闘技場

(姉さん、僕に力を貸してください……！)

「アビリティー・トレース・システム
ATS、スタート」

ATS。ワンノフ・アビリティーをトレースし使うシステム。といっても、もちろん再現率は解析度に比例し、エネルギー消費量は解析度が低ければ低いほど伊達じゃない。さらにいくら解析しても99%止まりなのだ。ある一つのワンノフ・アビリティーを除いては。

(スタートアビリティー……【一甦冥焰^{いっごうめいえん}】)

《紫艶》が《雪片》のように、しかし逆の黒い輝きをみせる。ATSはマインドコントロール。つまり、第三世代型兵器。さらに、VTSと同じで本来は使用不可だ。

ボクには姉さんが居た。IS乗りだった。当時唯一、織斑千冬と刺し違えるほど対等に渡り合えた人だった。今は、とある事故で行方不明である。その姉さんの使っていたIS『八咫烏^{やたがらす}』のワンノフ・アビリティーが【一甦冥焰】だった。

しかし、【零落白夜】のようにこの『蒼柳』のワンノフ・アビリティーになったのではなく、完全なデータとしてコアに記録されてい

た。しかし、この機体のコアは『八咫鳥』のコアではない。しかし、故に、【一甦冥焰】のみが解析度100%なのだ。

「はああああああ!!!!!!!!」

ひたすら剣を振るう。ただがむしやらに。

コピーとはいえ、『暮桜』つまり織斑千冬のデータだ。そう簡単には攻め込ませない。

だが、防がれようが弾かれようが関係ない。それで良いのだ。

「六音……」

「大丈夫だ筈。ユウを信じろ」

【一甦冥焰】は【零落白夜】とは逆、つまり、接触した、シールドエネルギーを吸収するのだ。

ただそのエネルギーは自分のエネルギーとして利用するには変換という過程をやらなければならない。

「やああああああ!!!!!!!!」

ひたすら切る、伐る、斬る。

こうしている間にも着実にかつ正確にエネルギーは貯まっていく。

「紫艶 エネルギー保存臨界点」

一時的保存量の限界まで来たことを知らせるウィンドウが出てきた。瞬間、『偽暮桜』が押され遂に崩れる。おそらく最初で最後のチャ

ンス。

(チェンジアビリティー！)

思いは言葉となる。

「【零落白夜】 ああああ！……！」

双刃刀を持ち変える。今度は《雪片》が【零落白夜】の輝きをみせる。

本来の《雪片》と《紫艶》の運用方。【一甦冥焰】で《紫艶》にエネルギーを貯め、【零落白夜】を《雪片》で放つ。威力はオリジナルにも引けを取らない。

臨界点まで来てるなら、「【零落白夜】解析度48%」という心許ない表示も気にならない。

横一闪、相手の刀を弾く。

そしてすぐさま頭上に構え、縦に真っ直ぐ相手を断ち切る。

いわゆる、一闪二断の構えである。

ジジッ……と紫電が走り、『偽暮桜』が真っ二つに割れる。そして、気を失うまでの一瞬である間にボクとラウラの目があった。その目はひどく弱っていて、助けを求めているようだった。

「……怪我がなくてよかったです」

力を失い崩れるラウラを抱き抱えて、ボクはそう呟いた。

強さとは なんなのか。

その答えは無数にあるのだろう。

『強さというのは、誰かを護る為のもの、その延長にある、と思いま
す』

・・・そう、なのか？

『はい。今日であったばかりでも、ほんのさつき横を通った人でも、
誰だっていいんです』

誰だって・・・。

『後は自分の思うままに護ればいいんです』

恩着せがましくないか？

『はははっ！かもしれません』

そいつは その男は ニコニコと笑った。

『それに、人って一人で生きてるように見えて、必ず何かを支えら
れている。それだって、護る、の一つです』

どうしてそこまで護る事に固着する？

『そうですね……。まあしいて言うならそれは』

それは……？

『護りたいから護るんです。ですから、あなたも護りますよ。ラウラ・ボーデヴィツヒさん』

言われて、私の胸は初めての衝撃に強く揺さぶられる。

『必ず、ね』

ああ、そうか。これが……。そうなのか。

ときめいてしまったのだ。

そして早鐘を打つ心臓が言っている。こいつの前では私はただの十五歳なのだと、ただの『女』なのだと。

六音、唯。

ああ、これは確かに。

惚れてしまいそうだ。

保健室

「う、あ……」

ぼやっとした光が天井から降りているのを感じて、ラウラは目を覚ました。

「気がついたか」

その声は、他でもない。自らが愛してやまない教官こと織斑千冬だ。

「私……は……？」

「全身に無理な負担がかかったことでの筋肉疲労と打撲がある。しばらくは動けないだろう。無理をするな」

しかし、かつての教え子。簡単には誘導されない。

「何が起こったのですか……？」

無理をして上半身を起こすラウラは、全身に走る痛みとその顔を歪める。赤い右目と金色の右目、そのオッドアイはただ真っ直ぐ千冬を見つめ、問いかける。

「ふう……。一応、重要案件な上に機密事項なのだな」

かいつまんで話せば、本来研究・開発・使用が禁止されているVTSがラウラのISに積まれていた。

発動条件は、操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして、操縦者の願望とも言える意志。

近々、委員会からドイツ軍に強制調査が入るとか入らないとか。

「私が・・・望んだからですね」

あなたになることを。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、はいっ！」

「お前は誰だ？」

「わ、私は・・・。私・・・は、・・・」

「誰でもないならちようどいい。今から貴様はラウラ・ボーデヴィツヒだ。何、時間は腐るほどあるぞ。なにせ三年間はこの学園に在籍しなければならぬからな。その後も、死ぬまで時間がある。たっぷり悩め、小娘」

「あ・・・」

千冬の言葉が意外だった。まさか自分を励ましてくれるとは思ってもみなかったラウラは、ただポカンと口を開けていた。千冬が席を立ってベッドから離れる。教師の仕事に戻るようだ。

「ああ、それから」

ドアに手をかけたところで、無理向くことなく再度言葉を投げ掛けた。

「『あなたはあなただ』。そこのお前の足下で気持ち良さそうに寝ているやつからの伝言だ。お礼はそいつにするんだぞ」

そう言って部屋を去っていった。

足下を見るとそこには六音が寝ていた。自分も傷だらけのはずなのに付きつきりで看病していたらしい。

「ふ、ふふ・・・ははっ」

気持ち良さそうな寝顔を見ると、なんとなく安心が心に満ちていく。

（私は私であって、それ以上でもそれ以下でもそれ以外でもない、か・・・）

そして、本当のラウラ・ボーデヴィッツは、これからはじまる。
そう思うと、自然と笑みがこぼれた。

第十六話 V T S V S A T S (後書き)

水蓮寺「実はこの回は、書きたかった回の一つです！」

智沢「黙れ、早くかけ」

水蓮寺「はい・・・」

六音「あ、ユウにはちゃんと唯って漢字があるんですよ！なぜかみんな読んでくれませんが」

水蓮寺「だって文字変換がめんどいもん」

六音（。。。）ポカーン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1349t/>

IS<インフィニット・ストラトス> ~こんな青春アリですか? ~

2011年10月21日03時01分発行